



弘大農学生命科学部 同窓会会報

第31号

平成25年6月発行
発行 弘前大学農学生命科学部同窓会
TEL 0172-36-2111
FAX 0172-39-3750
振替 02340-7-564
印刷 (株) 笹 軽 印刷



祝・佐々木長市教授学部長就任

育み合おう 夢の種！

鈴木裕之前学部長に深謝

同窓会長 三 上

たつみ
巽

創立後58年余の歴史のもとで

○私共の母校、国立大学法人弘前大学農学生命科学部は昭和30（1955）年に当時のリンゴ生産者等、地域の農業者、行政・民間の農業関係機関の方々の熱き想いのもとに創立され爾来、平成9（1997）年に農学生命科学部として発展的に改組のうえ本

年59年目を迎えております。このような歴史・経過のもとで平成25年3月現在、卒業生の数は6,763名の多くを数えるに至りました。

○私ごとで恐縮ではありますが、46年前の昭和42（1967）年3月卒業後青森県庁に就職した当時は、同窓生の数の少なさ及び幹部職員の少ない職場環境のもとで、悲喜こもごもの大人社会の人生模様



藤崎農場で育成され、普及が進む、赤い果肉のりんご『紅の夢』

が展開されたことを思い出すにつけ今や、いい意味での隔世の感禁じ得ないものを覚えます。

リンゴ新品種『^{くれない}紅の夢』等に垣間見る学部同窓DNA

○やや硬い話題になりますが母校・弘大の教育のモットーは「世界に発信し、地域と共に創造する弘前大学」と掲げております。

その具体的な理念としては「知的、道徳的及び応用的能力を展開させ、人類文化に貢献し得る教養識見を備えた人格者の育成を目的とする」とし、その具体的な目標としては「教育、研究及び社会貢献の中心課題として、世界と地域に対し人材の育成と情報の発信を行うことをその目標とする」としております。

○往時、弘大在学中は卒業するために必要最小限の単位取得に四苦八苦の体であった私如きでありました故、罪滅ぼしの想いもあつての同窓会活動に係る機会を戴いている立場から時折、母校の現況を新聞やテレビ等を介し垣間見るにつけ、「中々に、よく頑張っているじゃないっ、我が母校・同窓は！」と嬉しく拝聴・拝読させて戴く中に、中見出しのような評価高き想いを抱くのは一人私だけで無いものと推察しているところです。

夢の種を育み合える要諦、それは「信頼と絆」

○私共の学部の創設とほぼ時を同じゅうする昭和30(1955)年8月に、国産初のロケット開発に成功した糸川英夫博士は後に、とある記者に「ロケット開発で一番ご苦労されたことは？」と尋ねられ、「ロケットの開発・研究そのものに要した

時間よりも大学内外の人間関係の軋轢・調整に要した時間の方が多かったことでしょうか」と答えられたとのことであり、組織に禄を食んでいる私としては示唆に富んだ箴言として今なお深く記憶に留めさせて戴いているところです。

○私が今敢えてこの話題を取りあげましたのは「弘大、その中での農学生命科学部として学部が目指す成果・実績をあげていくかについて考えた場合、教職員各自の前向きな取り組みが必須であることは論を待たないところではありますが、前述の糸川博士の箴言に想いを致し、関係教職員間同士が課題・情報を共有したうえでチームワークよく取り組むことこそが肝要であり、かつ、その要諦は学部のリーダーたる学部長の信頼感に富む人間性の存在こそが極めて重要であると考えます。○ご案内のようにこの4月、前学部長の鈴木裕之教授が学部内規の2期4年満期を顕著な成果のもとに満了され、その後任として佐々木長市教授にバトンタッチされました。前・現学部長共に学部長に推挙される前に副学部長として学部長が主導する課題・目標の解決・前進に向け補佐役として精励努力された姿・取り組み状況が教職員に評価され、結果として学部長に推挙されたものと私は受け止めております。

○私共同窓・OBが期待する大学・学部が目指す成果、即ち「夢の種」を育み合うための要諦である「信頼と絆」を醸成し、花を咲かせ実を結ばせる学部のリーダーたる新たな学部長に、前述のような状況のもとに佐々木長市教授が推挙ご就任されたことを6千7百余名の同窓会員共々、衷心よりお喜び申し上げますと共に大いなる期待を寄せさせて戴く次第であります。

「東日本大震災に関する学生への義捐金」について

平成25年3月31日現在、賛同者は58名で 義捐金合計291千円です。このお金を使わせて頂きまして学生への支援を行っております。賛同されました方々にはお礼を申し上げます。

一部、卒業生の皆様に、「弘前大学同窓名鑑」作成のための調査カードが届いているようですが、この名鑑作成に当同窓会ならびに弘前大学同窓会は関わっておりません。



地域の大学としての使命と役割

農学生命科学部長 佐々木 長 市

同窓会会員の皆様には、ますますご健勝のこととお喜び申し上げます。平素より本学部の活動へご支援いただき、衷心より感謝申し上げます。この4月に農学生命科学部長に就任しました。1995年（平成7年）に着任し18年あまりが経ちました。着任早々、大学の学部改組の嵐にさらされたことが昨日のこのことのようにです。農学部へ赴任後2年目の平成9年には農学生命科学部に改組され、平成20年度には2度目の改組が行われました。所属学科は地域環境工学、専門は農地工学になります。この4年は、副学部長として、鈴木裕之前学部長の改組後の教育研究の充実と大学院開設をお手伝いして参りました。同時に、弘前大学の機能強化の4本柱の研究所の一つである白神自然環境研究所長も2年半に渡り、務めて参りました。

鈴木前学部長は、国立大学法人後の毎年1.3%という人件費削減環境のもとで、教員数を減らすことなく、かつ優秀な若手教員を多数採用し、学部の教育・研究力を向上させてこられました。平成20年度には、「生物学科を有する農学系学部」という特徴を全面に出すべく4学科から5学科に改組しました。農学と生物学の融合を新学部の特色の一つとし、かつ学科の個性を出しきめ細かい教育を着実に実施されました。平成24年度からは、5学科に対応する一専攻5コースからなる「大学院農学研究科」の設置をしました。これまでの専門領域の垣根を低くし、隣接する学問領域の修学を促し、かつ就職に有利な科目を開講してほしいという声に対応した科目の配置の教育プログラムになっています。多様な進学希望者に対応するため「学術研究プログラム」と「実践研究プログラム」を設定し、“より深く”あるいは“より広く”学びたいという意欲を持った学生の進学を促進しました。また、未曾有の被害をもたらした3.11東日本大震災に際しては、学部の先頭にたって、被

災学生への手当はもとより、学部あげての復興の学術的な面からの取り組みを積極的になされました。このように前学部長とともにすすめてきた取組を生かしつつ、これからの本学部の果たすべき役割について考え、今後も邁進したいと思っております。

現在、大学は「大学改革プラン」という新たな基本方針のもとにその使命を果たすことが求められており、その背景には、国立大学には我が国の再生と持続的発展を実現することへの期待があります。国立大学法人は、機能強化という名の下に、その使命を4つの方向として示すことが求められています。弘前大学は、この4つの中から地域の中核大学(Center of community)としての役割をその方向としています。地方国立大学は、教育の機会均等や地域人材の輩出という基本的役割のみならず、これまで以上の地域と大学の連携強化、大学の生涯学習機能の強化、地域の雇用創出・課題解決への貢献が求められています。本学部も、文科省から、25年度末までに学部存立の意義確認のためのミッションの再定義を策定する必要に迫られています。地域でのインターシップ・実習状況なども評価の指標として取り上げられており、こうした状況の中では、同窓会諸氏の協力なしには、学部の発展充実は望めないと思われま

す。昨年度の厳しい就職状況にもかかわらず、本年5月1日現在の調査結果では、学部生98.2%、大学院生97.5%という高い就職率が実現できました。これもひとえに同窓生はじめ、関係各位の協力のお陰と深く感謝申し上げます。今後とも、同窓会会員の皆様方のご協力とご支援をお願いし、ご挨拶とさせていただきます。

定年退職教員からの寄稿～1



学科の思い出

角野三好

昭和41年4月弘前大学農学部農業工学科入学から退職を迎える日まで実に47年もの間弘前大学にお世話になりました。父の仕事の関係で青森県の大部分で生活し遊び盛りの高校生までを田名部（むつ市）で過ごせ、ほとんど受験とは関係のない生活から一転弘前大学同級生の活動的な輪のなかで生活できました。当時、教養学部から専門学部に移行するには、大変な時代で学科の30%は留年の憂き目にあっています。近年の大学ならほとんどが卒業年度が一緒なのに……。どちらがいいのか、わかりませんが。学生時代は水利学研究室でしたが農業造構学教室助手として大学に残ることになりました。残った大きな理由は、当時の研究室大塚嘉一郎教授の「君は、学科一回生だから、後輩の面倒をみたらどうかね」が決め手で、研究者の道が難関の現在では思いもよらない昔話でした。また、私の学力は甚だ怪しかったこともあり、「大学人（研究者？）としての、勉強は30歳までで、そこまでは一生懸命勉強し、ポテンシャルを高めることで、残りの人生を有意義に過ごすことが肝要です」。このようなことをいつも言われていたので勉強・勉強と努力していています。先生は雑用（？）の大部分を引受けてくれたので大変恵まれた時代だったと、今でも感謝で一杯です。しかし、私が30歳を超えるとともに35歳までの延長を認めるような内容に変わったような気がします。いずれにしても研究面はもちろん料理・洋裁・大工・プログラムなどなど多岐に渡り教えて頂きました。先生はその後岩手大学に転出されましたが、私の人生の師匠であることに変わりありません。

学科の性格から、講義で学んだことを発揮できるのは、公務員やコンサルタントに就職してもら

うのがいいと考えていたので、研究室では、40数年間ゼミ生の尻をたたきながら一緒に勉強していました。幸い研究室の60%強は公務員、6%強はコンサルの道を歩み、それぞれの立場で活躍しています。このことは、大変嬉しく、学科の一員として教員冥利につきます。また、毎年公務員試験を受験するたびに問題を暗記し忘れないうちに残すことを義務付けしていたので、後輩がどれだけ恩恵に預かったか計り知れません。常々、「本学科は入学しやすく就職は親の喜ぶ（もちろん本人も）大変良い学科です」と言っていました。公務員就業者は大学でも群を抜いていた（？）と思われませんが、これは後輩たちの努力のたまものです。退職にあたり心より感謝申し上げます。私の研究室と実験室には、卒業生が当時作った実験用の予備工作物などが残っており、なかなか処分できず結局退職までずるずる（失礼）保管しているものが多くあります。これらは、退職にあたり残念ながら処分させて頂きました。この場を借りてお詫び申し上げます。

長い、大学生活では学科の教員はじめ学部教職員の皆さんや沢山の方々にお世話になりました。心より感謝申し上げます。

特に、研究室卒業生の皆様とは楽しい思い出が沢山あります。本当にありがとうございました。今後も、お元気で活躍下さい。



定年退職教員からの寄稿～2

これまでの教育研究の中で気に掛けてきた2つのこと

高橋 照夫

1. 水田作りの兼業農家に育った私にとって、小学生の頃から農作業の手伝いはごく普通のことでした。春には牛耕、田植えの苗運び、秋には手刈り稲束のはせ掛け、夜遅くまで脱穀での稲束渡し、などを手伝う中で、正に人力・畜力時代における老若男女の働き手の辛苦や喜びを子供なりに身近に実感していました。高校進学頃から将来農業機械方面に進むことを意識したのも、そうした体験が下地にあったためと思います。その後大学で大型機械や当時開発されたばかりの歩行型田植え機について学び、働き手の労力軽減の可能性に大きな期待を抱いたものです。

さて、私が当時の弘前大学農学部で奉職した1970年頃、水稲作では官民挙げて動力田植え機や自脱型コンバインの開発への取り組みが始まり、以後実用化と普及が急激に進んで1990年代にはほぼ完成の域に達しました。それにより10アール当たり労働時間は約130時間から30時間程度まで大幅に減少し、働き手は田植えなどの重労働から解放されました。動力田植え機の開発過程を見ると、人の手指による苗植え付け動作を模した植え付け機構と苗送り機構が考案され、繰り返し連続動作が可能になったことが、発展のエポック・メイキングだったと言えます。

一方、果樹作や野菜作では、10アール当たり労働時間がリンゴ、ナス栽培でそれぞれ約220、2700時間というように膨大なため、労力軽減が大きな課題となっています。しかし、一般に対象物の生育状態が多様なため個々の状態を観察しながら作業を行う必要があり、機械化は困難でした。そう

した中で1990年頃から働き手の一連の動作を模した収穫ロボット開発の試みが始まり、画像処理法やロボットアーム機構などが研究されて来ました。この間私も果実とその周囲環境の識別や三次元位置取得のためのステレオ視の研究を行いました。一連の動作を総合的に扱うソフトウェア技術の実用化にはもう少し時間が掛かりそうです。

以上のように、農業の機械化は、水稲作ではほぼ達成されたものの、他の作目では未だ十分ではありません。就農者の高齢化や後継者不足などが深刻化している中で、政策としてITの高度利用やロボット化が重視されています。ただし、働き手が日々楽しく農作業でき、若者が将来に夢を持って働ける農業にするためには、自動化やロボット開発の際に、働き手がそうした作業機の補助的作業を強いられるのではなく、主導的な役割を担えるように考慮すべきと考えます。

1. 最後に、私が若い時分に知り、以来心の片隅に留めているドイツ人研究者の「人生目標」について触れておきましょう。それは、①子供を育てること、②本を書くこと、③木を植えること、の3つでした。私なりに、①は次世代人の育成、②は文化・社会への貢献、③は環境保全への貢献と解釈しています。これまで、①には教員の立場で関わってきたので、今後の人生では、②、③でさらなる貢献ができればと考えています。

定年退職教員からの寄稿～3



弘前大学で過ごした42年間

福地 博

2月頃、同時に退職される皆さんがまじめに最終講義などをされている時に、私は表記のタイトルと同じ題で思い出話をさせてもらいました。昭和46年4月1日、大学を出たての若造が助手として赴任し42年間を弘前大学で過ごさせてもらい平成25年3月無事退職しました。この間農業機械学コース、生産機械学講座で送りだした卒業生が365人、生物生産科学科と園芸農学科の農業機械系研究室卒業生を合わせると410名になります。卒論を指導した卒業生は75名でしたから教員の平均よりやや少ないことになります。これは若い頃コンビを組んでいた加藤弘道先生がたくさんの学生を引き受けてくださったことにもよります。さて75名の卒論にかかわった中の第1号が当日も来てくれていた47年卒業の市戸君でした。大学出たての私が取り上げたテーマはリンゴ樹枝の力学的性質の測定（タイトルははっきりしませんが）でした。これはその年を最後に退職される森田昇先生がリンゴの枝を用意してくださっていたのと、その年の後期から材料力学演習を担当しなさいということになっていたため、材料力学だけは勉強していたということによるものでした。

それ以後、農作業の軽労化・省力化、作業精度の向上、環境保全のための農薬の少量化などを目的に色々な機械について研究し、とくにスピードスプレーヤに関するものが長かったわけですが、結局私は農業に役立つ機械は1台も作れなかったというのが事実です。実験のために色々な装置を試作したり、機械部品を改良したりはしたのですが、それで効果があったというものには出合えず、結局はお蔵入りになったものばかりでした。しかし人は作ったのかなと自負しています。公務員に

なった人、農業機械メーカーをはじめこの業界に勤めている人にかかわらず卒業生の多くが社会の各方面で活躍しているのを誇りに思っています。卒業生の皆さんのますますの活躍を祈ります。

さて学内での生活を振り返った時に真っ先に思い出されるのが学長杯ソフトボール大会というやつです。農学部教官チームは昭和50年から平成8年の間に7回優勝しています。準優勝も3回あり、このチームのレギュラーとして参加できたのが楽しい思い出です。各部局から総勢20チームほどが出て戦うわけですから、この戦績はなかなかのものでした。これは私の赴任前後に若手の教員がかなり採用され、そのままほとんど異動がなかったため、毎年腕前は上がるしチームワークもよくなるしといった結果だったと思います。それに自称鬼コーチという人たちもいましたからね。そのほかには酸ヶ湯に一泊しての八甲田スキーは年に1回ですが10年続いたことですか。これには事務の方も参加していて、他の部局に異動になった後も参加してくれたようです。夏場の土曜の午後はテニスに興じたり、職員ゴルフ大会で優勝させてもらったり（これはたくさんのハンデをもらったせいですが）と仕事以外では張り切っていました。もともとこれらは20世紀の話で、ここ数十年はあまり面白いことがなかったようです。それはともかくとして、学部の先輩諸兄、同僚の皆さん、事務の皆さん本当にお世話になりました。ありがとうございました。最後になりましたが、農学生命科学部及び同窓会のますますの発展をお祈り申し上げます。

定年退職教員からの寄稿～4



退職に当たって —特に同窓会名簿について思うこと—

宮 入 一 夫

わたくしはこの3月に定年退職しましたが、皆様と同じ同窓生でもあります。45年前、初めて弘前の駅前に立った時、そのさびれた光景に驚きました。しかし大学から見えた雪を抱いた岩木山は何とも神々しく東京神田育ちのわたくしに深い感動を与えてくれました。弘前大学を卒業してから助手に採用され、わたくしの教員生活がスタートしました。同窓生でもあることから、数年後には同窓会の事務局のお手伝いをする事になりました。そのなかで当時最も大切な仕事は、同窓会員の名簿作りでした。数年ごとに発行することになっており、そのころすでに母校の教員となっていた工藤啓一先生や齋藤寛先生などと作業をすすめたことが思い出されます。卒業生も1000人に満たない時代ですが、ワープロがまだなく、すべて手書きでの作業でした。今では専門の業者に頼むことも可能なようですが、この同窓会名簿も2004年を最後に発行されていません。これは御存じのように2005年に全面施行された個人情報保護法とやらで一人一人掲載して良いかどうかの確認が必要で、今までのように安易に作る事ができなくなったためです。一々確認する時も個人情報の事もあり返事を聞くだけでも相当の手間がかかるはずで、そんなわけで発行を取りやめたのだと思います。名簿が発行されなくなり同窓会の存在意義もずいぶん軽いものになったように感じられます。新しく同窓会名簿を作ると会報と一緒に送るわけですが、当時はごく稀に自分の住所を削除してほしいという申し出がありました。今では名簿悪用の話もあり、そのような方はもっと増えることと予想されます。名簿の発行が取りやめになり、同窓の絆が失われていくのはおおきな損失におも

えます。昔は本棚の一面におかれた最新の同窓会名簿を手にし、自分の教え子のことを思いだし、如何しているかなと思いをはせることがよくありました。しかし、名簿がなくなると住所はおろか名前すら時間をかけ調べるという作業をしない限り知る手段がありません。まして他の研究室の卒業生などととても無理です。しかも現実には数年前の学生の名前すら思い出せません。携帯がさらにスマートフォンに変わろうとしている今の時代、最近卒業した学生さんとは年賀状のやり取りも少なく、益々教員と卒業生との関係は希薄になっているように感じられます。以前の同窓会名簿をみると一部勤務先も明記されており、その情報は就活をはじめとする学生にとっては重要な情報でした。場合によっては直接先輩に電話しいろいろ聞くなどということも可能でした。いまは就職支援センターがあるためかなりの情報はそこで得られると思いますが、教員から情報を提供することが難しくなりました。わたしは今でも必要に応じて最後に発行された同窓会名簿を見ることがあります。年齢からくる物忘れのせいもありますが、最後の名簿である2004年以前の学生さんの思い出はかなり鮮明です。しかし最近卒業した学生はともかく2004年以降の卒業生の名前がなかなかでてきません。しかも卒業年度が交錯し入れ替わり何とか名前を思いだしてもどちらが古いか混乱します。インターネット全盛の昨今、同窓会名簿はもう不用なのでしょうか。

晴天の日に仰ぎ見る岩木山の雄姿は卒業生の皆さんが学生時代に見た時と変わりありません。母校からいつも見ることができます。母校の発展と同窓生皆様のご健康とご活躍をお祈りいたします。

定年退職教員からの寄稿～5

「嵐を呼ぶ男」の最終講義「生存のための協力」仮説

生物学科 進化生態学 城田 安幸

2013年3月末で、37年間務めた弘前大学を「卒業」しました。1976年（昭和51年）7月1日に28歳で赴任してから、今年までに卒業されたみなさんは、約230名もいます。この内73名もの同窓生が、南は沖縄・九州から、北は北海道・帯広から、僕の「最終講義」のために駆けつけてくれました。結婚したパートナーや子どもさんたちも含め160名以上の方々に、123名しか入れない402講義室は満杯です。

ところが、当日は羽田ー青森間の第一便の飛行機は欠航。JRの海峡線は函館から運休。東北自動車道は閉鎖という大嵐。福岡から東京まで駆けつけ、羽田で足止めをくらった岩越弘樹さんと細谷忠嗣さんは、「羽田にもどる」かもしれない飛行機で青森に到着しました。北海道の沙流郡紋別からの野澤祐二さんは、函館で足止め。盛岡から高速バスで来る予定だった長沼俊也さんは盛岡で足止め。一関からくる予定の菅原寿昭さんとご家族は、自宅待機。まさしく、「嵐を呼ぶ男」の最終講義当日の天候は大荒れだったのです。

でも、前日から弘前入りしていた沖縄からの清水徹さんや、神戸の渡康彦さん、千葉からの中河原正英さんらは、「余裕」の昼食を弘前第3中学校前の食堂「飯村」ですませています。「豚ロールの生姜焼き定食」と、メニューも見ずに注文する彼らを、「城田先生の最終講義で帰って来た卒業生だな…」と、飯村の大将はすぐに見抜いたとのこと。

最初に僕を「飯村」に連れて行ってくれたのは、卒業生で写真家の江川正幸さん。彼と同級生の古西作治さんは、すでに別の世界に旅立ちましたが、いまでも学生時代と同じ姿勢好で、ときどき夢で

会いに来てくれます。癌と一緒に研究し、癌のために先に旅立った小野昭治さん、芝木秀和さん、理学部から正木先生のもとで修士論文を書いた白土一成さん。みなさんも古西さんと一緒に、向こうの世界で僕の最終講義を楽しんでくれたようです。沖縄生まれの父親の影響を深く受けた僕は、「亡くなられた」方々とも、「普通」に会話ができます。おそらく夢を見ているのだと思いますが、正木先生曰く「また 妄想に とらわれている」。

今年85歳になられ、ますますお元気な正木進三先生、安藤喜一先生をはじめ、鈴木裕之学部長、佐々木長市副学部長、神田健策弘前大学副学長もご出席いただき、葛西身延生物学科長のご挨拶に続き、僕の「最終講義ーダーウィンを超えて 寛大で豊かな敗北者たち」がはじまりました。

大阪府立大学の山岳部時代の部長先生、中尾佐助先生からの宿題「ダーウィンを超えなさい」の答えを、40年間考え続けて来ました。この問題は、ボルネオのランピルの森で、飛行機事故で先に別の世界に行ってしまった盟友井上民二さんからの「宿題」でもありました。答えはとても簡単でした。「生存のための競争」をしている集団と、「生存のための協力」をしている集団のどちらがより良く生き残ることが出来るかを考えれば良いだけだったのです。

数学モデルがなかなか完成せず悩んでいた僕の「目から鱗を落としてくれた」のは、ハーバード大学の M. A. Nowok 博士がクロアチア出身の女性数学者 C. E. Tarnita さんと、アリ学者で進化生物学の大御所 E. O. Willson 博士との共著論文で Nature に掲載された「真社会性の進化」でした。進化の「単位」は遺伝子や細胞や個体だけではな

く、個体群、種、種群など様々なレベルでの選択が働き、「血縁選択と包括適応度でハチなどの社会性の進化を説明するハミルトンのモデルは、間違っている」という趣旨の論文でした。

京都賞を受賞されたあと、一緒にパチンコ屋に行き「進化のシミュレーション」だとパチンコを楽しんでいたハミルトン先生と、ずっと一緒に考えて来ました。僕の仮説は、「チンパンジーと僕たちは約98%、ウニと僕たちは約70%、キイロショウジョウバエと僕たちは約61%同じ遺伝子をもっている。それならヒトとヒトとの違いはほぼ0だ」というものです。つまり、「親と子どもの血縁度は0.5ではなく限りなく1.0に近い」。約20万年前にアフリカで進化した僕たちホモ・サピエンスの遺伝的な違いはほとんどない。生物は38億年の進化の歴史の中で、「生存のための競争」をしてきたのではなく、「生存のための協力」をしてきたのだ。この考えにたどり着いたとき、僕の

目から大量の「あせ」が出ました。

「争って奪い合う」同窓会と「分かち合って与え合う」同窓会。どちらが「よりよく生き残れる同窓会」か。答えは明確でしょう。祝賀会には106名もの同窓生のみなさんや教員のみなさんにご参加いただきました。僕は本当に「幸せ者」です。「西弘」で開催された祝賀会の二次会で岩越さんが言ったのは、「先生は やっぱり 嵐を呼ぶ男」でした。二次会は深夜まで及び、最後は荒井純さんが僕を自宅まで送ってくれました。本当にみなさんに心から感謝いたします。特にすべての計画・取りまとめをさせていただいた倉内賢一さん。アフリカから「ビデオレター」を送っていただいた前野浩太郎さん。僕も人生最後の目的に向かい、猛進いたします。「世界全体が幸せにならない限り 個人の幸せはあり得ない」と「叫び」続けます。



事務局から

平成17-18年度総会で「弘前大学農学生命科学部同窓会における個人情報の取り扱いについて」が制定されました。支部会開催などで、会員情報が必要な際には「同窓生情報活用依頼書」を郵送またはファックスでお送り下さい。様式は会報第23号（2005年6月1日発行）の10ページにあります。

同窓会ホームページ (<http://nature.cc.hirosaki-u.ac.jp/dosokai/>) からダウンロードできます。

宮入一夫先生より「生化・有機研同窓会」として、同窓会に対し3万円のご寄付をいただきました。感謝を込めて、会員のみなさまにご報告いたします。

姫野俵太先生 弘前大学学術特別賞受賞

栗田大輔 (分子生命科学科)

2013年2月13日に弘前大学学術特別授賞式が執り行われ、本学部分子生命科学科（旧応用生命工学科）の姫野俵太教授が受賞されました。受賞対象となった研究は「トランストランスレーションの研究」というテーマです。先生が弘前に着任したのは1993年ということなので、ちょうど20年という節目の年に今回の受賞となりました。

先生は弘前に着任してから武藤昱先生（当時教授）、牛田千里先生と共同で、ある変わったRNAの研究を始められました。当時は、トランストランスレーションという名前もついておらず、まったく手探りの状態からのスタートだったということです。先生はこのちょっと変わったRNAがtRNAとmRNAの両方の機能を持つことを試験管内で実験的に示し、tmRNAと命名されました。また、tmRNAはタンパク合成中のトラブルを解消するという役割を持つことを明らかにし、一連の反応をトランストランスレーションと名付けました。現在では、tmRNAという名前は市民権を得ており、Molecular Biology of the Cell等の教科書で紹介されるまで有名になっています。さらにtmRNA結合タンパク質であるSmpBに着目され、このタンパク質が「tRNAとmRNAの擬態分子」であることを明らかにし、トランストランスレーションの全体像に大きなインパクトを与えました。最近では、tmRNAに限らず、タンパク合成の場

であるリボソームの生合成系の解明、あるいはRNAとストレス耐性に関わる研究など、国内だけでなく海外の研究グループと複数の共同研究を進められており、活躍の場を広げられています。

先生は学生の教育にも熱心で、議論を通して学生を育てる、をモットーに多くの人材を社会に送り出してきました。どれだけ忙しくても学生の論文講読に付き合っ議論を交わしたり、実験データの解釈について学生と共に悩んでおられました。

先生のお人柄を漢字一文字で表すとすれば、「両」あるいは「反」でしょうか。私が学部授業を受けていた頃は、温厚な先生という印象でした。その後、研究室に所属してから先生の印象は一転しました。両面性を持つことに気が付きました。どうということかと申しますと、先生は「心配性」かつ「勝負好き」、「悲観的」かつ「楽観的」、「慎重」かつ「大胆」という矛盾する2つの面を共有しているように見えるからであります。また先生は、人真似を嫌い、常に人とは反対の側面から物事を考えることの重要性を説かれてきました。このような先生のお人柄は、学生への教育にも表れていました。今回の受賞となった「トランストランスレーションの研究」も先生の長年の研究教育活動の集大成だったことと思います。姫野先生の益々のご発展を祈念しつつ、筆を擱きます。



tmRNAの研究を始めた当時の写真（1994年）

姫野俵太先生（中央）、武藤昱先生（左）、牛田千里先生（右）

平成24年度卒業生・修了生の祝賀会ならびに就職・進学先

平成25年3月22日に、平成24年度の農学生命科学部卒業証書授与式および大学院農学生命科学研究科の学位記授与式が行われた。今年度の学部卒業生は184名、大学院修士課程修了生は50名で、農学部と農学生命科学部をあわせた卒業生は6,763名、研究科修了生は907名となった。

学部校舎正面玄関前での恒例の記念写真撮影の後、学部・後援会・同窓会共催の祝賀会兼同窓会歓迎会が生協食堂大ホールで行われ、恩師や友人との別れを惜しんだ。



本年度の卒業・修了生の就職先および進学先は以下の通りである（括弧内に数字を記入した場合以外は各1名である）。

生物学科

(株) アグリカルチャーセンター、(株) イエムラ、(株) ソフトウェア・サービス、(株) パワーリハ、(株) マシス、(株) リークコーポレーション、(株) 医果同源りんご機能研究所、(株) 富士

通システムズ・イースト、トモエ乳業 (株)、小松精練 (株)、東北大学東北メディカル・メガバンク機構、日本製紙木材 (株)、日本全薬工業 (株)、地方公務員 (2)、国公立教員：青森県、弘前大学大学院 (11)、東北大学大学院 (2)、北

海道大学大学院（2）、東京海洋大学大学院、千葉大学大学院、大阪大学大学院、筑波大学大学院

分子生命科学科

（株）コハタ、（株）ツルヤ、（株）ホリ、（株）マルタケ、（株）飛竜企画、（株）宝幸、（有）ファーム富田、ホームマック（株）、ワダカン（株）、伊藤ハムデイリー（株）、東北国分（株）、日本住宅（株）、日本甜菜製糖（株）、浜友観光（株）、国公立教員：北海道、地方公務員（2）、洗足学園音楽大学、弘前大学大学院（10）、東北大学大学院（4）、北海道大学大学院、東京医科歯科大学大学院

生物資源学科

（株）コハタ（2）、（株）SER、（株）さくら野百貨店、（株）シー・アイ・シー、（株）臨海セミナー、グラントマト（株）、ホームマック（株）、紅屋商事（株）、独立行政法人青森県産業技術センター、函館市亀田農業協同組合、有楽製菓（株）、地方公務員（6）、奥羽大学、弘前大学大学院（8）、東北大学大学院（2）、筑波大学大学院

園芸農学科

（株）AWAS、（株）サクラバ、（株）シード、（株）ジーピーエス、（株）ユーアイ、（株）キセキ九州、（株）キセキ東北、（株）青森銀行、（有）ジャスメック、（有）ブライトピック、いわい東農業協同組合、プライムデリカ（株）、芽室町農業協同組合、岩手缶詰（株）、山崎製パン（株）、秋田清酒（株）、小田島商事（株）、新岩手農業協同組合、清水農園、青森県農業信用基金協会、青森保健生活協同組合、雪印メグミルク（株）、東日本旅客鉄道（株）、東北エア・ウォーター（株）、日本ニューホランド（株）、美瑛町農業協同組合、米久（株）、国家公務員、地方公務員（3）、国公立教員：青森県、弘前大学大学院（7）、兵庫県立大学大学院、東北大学大

学院

地域環境工学科

北海道旅客鉄道（株）（2）、（株）キタコン、（株）キタテック、（株）さくら野百貨店、（株）タカヤ、（株）ビット・エイ、（株）ユニバース、アイ・イー・シー（株）、サンエスコンサルティング（株）、ホームマック（株）、みちのく銀行（株）、ユニオン建設（株）、三戸芝浦電子（株）、青森ミツウロコ（株）、日本ミクニヤ（株）、地方公務員（12）、国公立教員：青森県、弘前大学大学院

<大学院農学生命科学研究科修士生>

生物機能科学専攻

（株）ミツハシ、DICデコール（株）、ホクレン農業協同組合連合会、伊藤ハムデイリー（株）、医療法人社団英ウィメンズクリニック、階上キューピー（株）、新函館農業協同組合、朝日工業（株）、日本清酒（株）、北興化学工業（株）、地方公務員

応用生命工学専攻

（株）アーク、（株）セロテック、（株）チャーム、（株）応用医学研究所、（株）南部医理科、キッコーマンソイフーズ（株）、シミック（株）、パナソニックメディコムネットワークス（株）、わかもと製菓（株）、極東製菓工業（株）、国立大学法人秋田大学、青葉化成（株）、太子食品工業（株）、日本農産工業（株）、地方公務員、岩手大学大学院連合農学研究科

生物生産科学専攻

（株）ササキコーポレーション、（株）マエダ、（株）東祥、岩手缶詰（株）、MAMMUT SPORTS GROUP JAPAN（株）、日本赤十字社、和同産業（株）、地方公務員（2）、国公立教員：秋田県、岩手大学大学院

地域環境科学専攻

ビ・ハイア（株）、地方公務員（2）

新任教員の自己紹介



森 谷 慈 宙 助教（地域環境工学科）

2013年1月から地域環境工学科に着任して参りました。弘前大学の一教員として迎えて頂いたことを心より感謝申し上げます。青森県は農業が盛んであり、いくつかの野菜種では全国一のシェアを誇っております。その一方で豪雪地帯でもあり、除雪費が市の財政を圧迫しているとのことです。これまで地中熱ヒートポ

ンプに関する研究を行ってきました。

今後は、今まで培ってきた研究を軸とし、地域の課題を解決していくよう努力していくつもりです。その手始めとし、自然エネルギーを使った融雪や冬の農業について研究を行って参るつもりです。何卒ご指導のほどを、よろしくお願い申し上げます。



池 田 紘 士 准教授（生物学科）

2013年4月より農学生命科学部生物学科に着任いたしました。池田と申します。森林に生息する無脊椎動物の多様性にひかれ、これまでは、甲虫やミミズを主な研究対象として、その進化や種分化に関する研究を進めてきました。青森県には、白神山地や独立峰である岩木山と

いった山々に加え、低地には湿地や草地が広がるなど環境は実に多様で、調査を行うには十分なフィールドが広がっています。学生さんと一緒に、このようなフィールドをうまく活用しつつ進化生態学的な研究を進めていければと考えています。どうぞよろしくお願いいたします。



濱 田 茂 樹 准教授（分子生命科学科）

2013年4月に農学生命科学部分子生命科学科に着任いたしました。同学科をご退官された宮入一夫先生に師事し酵素学の面白さに目覚めて以来、これまでは作物の澱粉や貯蔵タンパク質の生合成を中心に、植物や微生物由来の酵素やタンパク質の機能解析を行っ

てきました。最近では、酵素を利用した物質生産の研究にも興味を持っています。基礎研究と応用研究の両面から、青森県の基幹産業である農業に少しでもお役に立てればと考えております。出身大学で教育に携われることを誇りに、学生と研究の面白さを共有しながら一緒に成長していきたいと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。



叶 旭 君 准教授（園芸農学科 園芸農学コース）

2013年4月に農学生命科学部に着任致しました。東京農工大学大学院連合農学研究科（農業工学）

を卒業後、東京大学大学院農学生命科学研究科でポストドク研究を行ってきました。博士課程では、ハイパーとマルチスペクトル・イメージング技術

を用いた、温州みかんの隔年結果のダイナミクスを予測する手法を開発しました。ポストクの研究では、野菜の鮮度を評価する非破壊的な分光法の可能性を調べ、スペクトルデータに基づいた細胞

の ATP 含有量測定の新たなアプローチを開発しました。これからは、センシング技術の農業と食糧分野への応用に関する研究を続けていきたいと思ひます。よろしくお願ひいたします。



丸 居 篤 准教授 (地域環境工学科)

平成25年4月に農学生命科学部地域環境工学科に着任いたしました。津軽平野では農業用水不足や水質の問題があると聞き、遥々、九州は福岡からやってきました。岩木川左岸の国営事業や津軽ダム建設の進捗と岩木川

流域の水問題をテーマに活動していきたいと考えています。出来るだけ地域に出向いて活動し、様々な経験や地域の課題解決をしたいと考えています。雪国は初めてですが、冬に雪を満喫できることを楽しみにしています。どうぞよろしくお願ひいたします。



森 洋 准教授 (地域環境工学科)

2013年4月に農学生命科学部地域環境工学科に着任致しました。農業土木施設(ダムや用水路、パイプライン等)の力学的安定と性能・機能評価についての研究を行っています。最近では、液状化による土木施設構造物への影響につい

での研究を進めているところで、地域特性を反映させた性能規定型設計の実現を目指しています。3月までは、東京都庁の職員として働いていましたので、生活と職場環境が180度変化し、多くの事柄で皆様にご迷惑をおかけすることが多々あるかも知れませんが、何卒ご教授のほど、宜しくお願ひ致します。

教職員人事

退職(定年退職) 平成25年3月末日

- 高橋 照夫 (たかはし てるお)
教授(地域環境工学科)
- 宮入 一夫 (みやいり かずお)
教授(分子生命科学科)
- 城田 安幸 (しろた やすゆき)
准教授(生物学科)
- 萩原 守 (はぎわら まもる)
准教授(地域環境工学科)
- 福地 博 (ふくち ひろし)
講師(園芸農学科)
- 角野 三好 (かどの みよし)
講師(地域環境工学科)

採用(新任)

- 森谷 慈宙 (もりたに しげおき)
助教(地域環境工学科) 平成25年1月1日
- 池田 紘士 (いけだ ひろし)
准教授(生物学科) 平成25年4月1日
- 濱田 茂樹 (はまだ しげき)
准教授(分子生命科学科) 平成25年4月1日
- 叶 旭君 (よう きょくくん)
准教授(園芸農学科) 平成25年4月1日
- 丸居 篤 (まるい あつし)
准教授(地域環境工学科) 平成25年4月1日
- 森 洋 (もり ひろし)
准教授(地域環境工学科) 平成25年4月1日

(昇任)

- 千田 峰生 (せんだ みねお)
教授(生物資源学科) 平成24年5月1日
- 遠藤 明 (えんどう あきら)
准教授(地域環境工学科) 平成25年4月1日

会費納入と住所通知のお願い

平成25-26年度会費5,000円を、同封致しました振込用紙でお納め下さいますようお願い致します。なお、すでに平成25-26年度会費をお納めいただいた会員には振込用紙を同封しておりません。

転勤や転居で住所が変更になりましたら、事務局までご一報下さい。

同窓会事務局

〒036-8561 弘前市文京町3 弘前大学農学生命科学部同窓会

工藤 明 電話 0172-39-3842 (FAX 兼用) E-mail akudo@cc.hirosaki-u.ac.jp

松崎 正敏 電話 0172-39-3804 E-mail mma@cc.hirosaki-u.ac.jp

田中 和明 電話 0172-39-3816 E-mail k-tanaka@cc.hirosaki-u.ac.jp

同窓会総会開催のお知らせ

平成25-26年度総会を下記の通り開催いたしますので、ご案内申し上げます。

記

日時 平成25年7月13日(土) 午後3時~4時

場所 弘前パークホテル(〒036-8182 青森県弘前市土手町126)

電話 0172-31-1111

- 議題
- 1 平成23-24年度事業報告
 - 2 平成23-24年度会計報告
 - 3 平成25-26年度事業計画
 - 4 平成25-26年度予算
 - 5 平成25-26年度役員
 - 6 その他

なお、総会終了後に懇親会(会費3,000円)を行います。準備の都合がございますので、ご出席いただける会員は、7月3日までに事務局にご一報下さいますようお願いいたします。

事務局担当者 松崎正敏 電話 0172-39-3804 E-mail mma@cc.hirosaki-u.ac.jp

訃報

金須 正幸(農業機械学 教授)

相沢 洵(農学科、土肥、S38卒)

月舘 光三(農業造構施設学 教授)

近藤 博康(農学科、農工、S40卒)

福重 裕康(作物学 助教授)

千葉 佳彦(農業工学科、水利、S49卒)

中尾 良仁(農学科、土肥、S32卒)(元同窓会長)

小林 政人(農業工学科、農地、S51卒)

都谷森五郎(農学科、土肥、S33卒)

上記の会員のご逝去の報が届きました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

自然史の歴史博物館と人類学

自然史の歴史博物館と人類学